道化師の恋

金井美恵子

道化師の恋

天恵子

中央公論社

道化師の恋　©一九九〇 検印廃止

一九九〇年九月一五日　初版印刷
一九九〇年九月二五日　初版発行

著　者　金井美恵子
発行者　嶋中鵬二
印刷所　三晃印刷
製本所　小泉製本
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替　東京二-三四

Printed in Japan　ISBN4-12-001968-3

道化師の恋　目　次

第1章　道化師の恋　7
第2章　今夜のメニュウ　32
第3章　蒼い時　52
第4章　愉しみと日々　82
第5章　智慧の樹　99
第6章　天使の誘惑　127
第7章　ゲームの規則　152

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第8章　秘密の花園　180
第9章　笑う犬　208
第10章　緑色の部屋　227
第11章　山の音　254
第12章　彼岸花　282
第13章　草の上の昼食　304

装　幀　金井久美子

道化師の恋

第1章　道化師の恋

引っ越し祝いに何か御馳走するわ、七時に車をむかえにやるから、ちゃんと仕度しておくのよ、というジーン・アーサーに似ているという声で電話があったので、引っ越しの手伝いに来ていて、夕食はさっき駅前に中華料理屋があるのを見ておいたから、そこで食べることにして、でもね、なるたけ自分で料理作るようにしてね、あんた、うるさがるけど、ママが簡単な料理のレシピのノート作ったから、ほら、ここよ、冷蔵庫の上、それを見てちゃんと作ってよね、と、この十日間ずっと言いつづけていたことをまた繰り返している母親に、いいよ、おふくろ、今日はおやじに電話してメシ喰って一緒に帰ったら、おれ一人で食うからさあ、と善彦は言い、母親はそうねえ、どうせ、光彦と愛の夕飯は用意してきたし、引っ越しが無事にすんだこと、早く報告したいし、パパの都合が良かったら、そうするか、でもねえ、それじゃあ、二人でパパに御馳走してもらおうか、渋谷の清光園で焼肉、今日は二人とも働いたんでものね、と答

えたが、それでも考えなおして、そうか、初めての一人暮しの最初の夜を一人で過したいのか、そうか、わかった、と言って父親の会社に電話をして、これこれの訳なので、どう？　あなたとたまに二人で御食事ってのは、あたし、なんとかって料理が食べたいわ、エステティックとかいうのが、流行してるでしょ。え？　エスニック？　と騒々しく喋って約束をし、善彦はほっとした。

母親はシャワーを浴び、着がえたシャツとジーパンをかばんに入れながら、さっきもう電話があったねえ、と意味もなく言ったり、冷蔵庫に今朝家で作って持ってきたイワシのうめ干し煮と辛子明太子とラタトゥイユがタッパーに入ってるから、ちゃんと食べてね、外で御食事をするんだったら、もっとおしゃれしてきたかった、などとあわただしく喋ってようやく、じゃあ、明日また電話するわね、と言いながら、靴をはき、善彦が、いろいろどうも有難う、と言うと、大したことないわよ、部屋をちらかしっぱなしにしないでね、ともう一言余分の注意を口にしつつ、じゃあ、と心残りそうにドアを開いた。

保子さんを追いかえしちゃったの？　一緒に来ればよかったのに、そのつもりだったのよ、と颯子は腹を立てたように言い、あたし、電話でそう言ったでしょ、ママも是非御一緒にって、と言い足しながら善彦の全身を点検する眼付きでジロジロ眺めて、それ似合わないわねえ、と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼の着ているグレー地に白いペンシル・ストライプの安物のスーツに批評を下し、なんだか、おとっつぁんみたいじゃないの、サラリーマンの、と断言してから、次にはネクタイの批評をした。それにいやあねえ、そういうネクタイ、いやあねえ、ピエール・カルダンなんて書いてあるのね、おとうさんがお中元にもらったのを、パパには派手ねって、保子さん、あなたにまわしたのね、きっと。

ネクタイに関してはまったくそのとおりだったので、善彦は顔を赤らめながら、それでも、グレーに白いペンシル・ストライプのスーツは自分ではなかなか気に入っていたし——第一、スーツというのはこれ一着しか持っていないし——濃いブルーと明るいブルーの水色のストライプのネクタイはグレーのスーツと白いカフスと丸い襟の付いたサーモンピンクのシャツに合うと思っていたので、いくら颯子が、洗練された趣味——と世間では言うのだろう——の持ち主で、たまたま自分のおしゃれが気に入らなかったとは言っても、何もそうズケズケ悪しざまに言うこともないだろうし、それに洗練されたブルジョワ趣味というのは、内心で思ったことを態度にあらわさないでいられるってことなんじゃないか、とむかむかして考えもしたのだが、ホテルのロビーの鏡に映った二人並んでいる全身の姿を見たかぎりでは、やっぱし全然見おとりする、ということを認める他ないことは確かで、とても自尊心が傷つけられ、このまま帰ってしまおう、と思うと、颯子が読心術でも心得ているように、あら、このまま帰っちゃわないでよ、と言った。

帰らないでよ。いいわよ、野暮ったいところが、なかなか可愛らしくもあるもんね。あなた、何が食べたい？　お腹すいてるでしょう、今日は肉体労働したんだから。

こういう言い方ってのはまるで母親的で気に入らないし、第一、ロビーで顔をあわせたとたん、人を混乱させるような嘘をついて――あなただけを食事に誘ってるのよ、とは言わなかったにせよ、おかあさんも御一緒にいらっしゃい、とも言いはしなかったんだし、それに、一人で来るのよ、というニュアンスを彼女は含めていたはずってことくらい、わからないわけないじゃないか――苛々させる人だ、まったく、と善彦は思ったけれど、本気で帰ってしまうつもりはもちろんなくて、こういうのは、エチケットと言えば言えるし、何かがおこることを期待しての――おきなかった場合には、ずいぶんと惨めでコッケイなことになるわけだけどね――下心というかスケベ心と正確に言ったほうがいいのかもしれないけれど、とにかく、どっちにしてもシャワーを浴び――いつもと違ってちゃんと石鹸で、脇の下その他の汗と脂で汚れてるところを、きれいに洗ってさ――下着だって、おふくろがおやじのと一緒に買ってくるBVDのブリーフなんかじゃなくて、ブルーに赤いフチのついてるタップパンツ型のトランクスに着替えてさえ来たんだから、やっぱし夕食は食べてから帰るつもりだし、それに何と言ってもとても空腹だった。引っ越しで、それほどはりきって立ち働いたというわけではなかったけれど、生活環境ががらりと変わるとお腹がすくものなのだ。猫とか犬はそういう場合、動物的に怯えちゃって食欲とか性欲をなくすもんだけど、ぼくはそういう単純な動物じゃないから、食欲も

性欲もなくなって、アゴをしきりに載せてだるそうな眼をしていて、べったりしていたミーシャ（シェパードの牡）とミケシュ（黒い大っきな牡猫、『ミッバチのささやき』に出て来て姉娘に首をしめられかかる黒くて大っきなカッコ良い猫にそっくりなんだぜ）みたいになったりはしないけれど、と善彦は、その昔、中野の借家から逗子に越した時のことを思い出し、もうとっくに死んでしまったミーシャとミケシュのことを思い出したりもした。

シェパードと猫にミーシャとミケシュという名前を付けたのは小学校の夏休みの課題図書で読んだ岩波のソビエトと東欧の少年小説の影響で、善彦は、その名前のとおりに優等生だったし、現在でも優等生なのだから、噂どおりに奔放といえそうな態度――奔放というより、むしろ人もなげな驕慢な態度といってもいいかもしれないが――で人を困惑させる元女優の失礼さに、彼女はそういう世界の人なのだから我慢しなければ、と自分に言いきかせつつ、それでも、自分がもうすでに彼女に魅惑されてしまっていることには気づいていたから、半分以上、うっとりとなりながら、すっかり逆上っている自分に、本当は怯えてもいた。颯子は一見さり気ないごくあっさりした黒い絹のニットのシース・ドレス――そういう名前でこういうタイプのドレスは呼ばれるわね、と後で善彦の質問に答えてくれたのだったが――に銀とトルコ石の複雑なデザインがロマノフ王朝風とでもいった感じの大きな胸飾りと言ったほうがぴったりなネックレスをつけていた。善彦は後で、どうしてその銀とトルコ石のオーヴァーな胸飾りについて、ロマノフ王朝風という感想を持ったのかと考えてみたのだが、思いあたったのはモロゾフのチ

ョコレートの箱の色と柄に、颯子のネックレスが似ていたせいだという結論に達した。

颯子・フラーとの燃えるような恋が終った後でも——恋に終りはないのだが——彼は、母親が薬箱がわりにバンド・エイドや包帯や正露丸や痛み止めを入れて用意してくれたモロゾフのチョコレートのブリキの箱を見ると——正露丸を五粒か三粒飲むために、その箱は再々開かれるのである——あの大仰で美しく黒い豊かな胸の上でキラキラ輝いていたネックレスを思い出し、その下の黒い布地に包まれた白くて豊満で濃いバラ色の尖った乳首——ミーシャの勃起した小さな痛々しくふるえる突起物に、奇妙なことにそれは似ているような気がしたが——へと思いをかり立てつづけるのだった。

颯子が腕をまわして背中の小さなホックを外し、肩を少しゆすると、なめらかな黒い絹の布地は手品師のハンカチのようにするりと、肩と腕と胸をすべり落ちて、シルク・ハットの中からハトとかウサギが取り出されるような、ありきたりなのだけれども、それでもやっぱり眼を奪う新鮮さで二つの丸い指をかぎりなく吸い込みそうに柔らかな乳房があらわれ、乳房の谷間に沈んだトルコ石の蒼ざめた反射が丸い二つのふくらみを、蒼白い陶器のように錯覚させ、彼女は、ドレスのウエストから尻の割れ目のあたりまでの長さのジッパーを、軽い葉と葉のこすれるような音をさせて引き下ろし、ごく軽く腰をひねると、黒い絹のドレスは腰のなめらかな丸い曲線にそって水蛇のようにすべり落ち、ワンルーム・マンションの部屋の木の床の上で柔らかな音をたてたのだが、ホテルのロビーでは、颯子はそういったことをまるでにおわせもせ

ず、保子さんが一緒だって思ってたから、浜作の二階を予約しといたんだけど、近頃の日本の若い人ってオサカナは駄目なんですって？　もったいないわねえ、と言ったのだった。

ぼくは何でも食べられますけど。でも、特にオサカナが好きってわけじゃないのね？　でも、特に嫌いってわけじゃないんです。じゃあ、浜作でいいわよね。あたし、昨日ニューヨークから帰って来たでしょ？　おとついから、ハモの湯びきが、とっても食べたかったのよ。小津先生の映画見た後で、谷崎先生の御本を読んでたらさ、浜作のハモのことが出てくんのよ、飛行機のなかでハモの夢を見ちゃった！　そしてね、眼が覚めたら、ウェイトレスじゃない、ええと、スチュワーデスの人が、いやらしい機内食のセットを運んでくるじゃない？　ワインと果物だけもらって食べたけど、成田についてすぐタクシーで浜作に駆けつけたのね、そしたら、なんとお休みだった！　糞(ガッデム)っ！　という気分だったわよ。ところで、新居の具合はどう？　居心地良さそうでしょ？　あの部屋は事務所用のワンルームだから、広いでしょ？　普通はお家賃は十二万いただいてんのよ、でも、イトコの保子さんの息子だからね、特別に二万円。タダでもいいんだけど、タダってのはいけないわよね。

タクシーで行くより、散歩がてら歩いたほうがいいわよ、あたし、ほら、こういうカカトの低いサンダルだし、歩きたいの、と颯子は先に立ってさっさと歩き出しながら、ひっきりなしにお喋りをし、颯子の着ているごくあっさりした黒いドレスが、首筋の付け根とウエストの二箇所が止っているだけなので、身体の動きにつれて布地の間から見える薄く背骨を浮きあがら

せているすべすべした背中に見とれて善彦は、つい、二、三歩脚が遅れた。

もちろん、善彦は、通行人の誰もが振り返って見るような美人と歩くのは初めてのことだったし、歩くのが初めてどころか、これは絶対に断言できるのだが、こんなにきれいな女の人を実際に見た、というのも初めてのことだったし、浜作で食事をするのもハモの湯びきを食べるのも初めてだった。

これが食べたかったんだ！　と颯子は嬉しそうに言って、ハモの肉と同じくらい真っ白な歯を見せて笑い、一口ハモを食べてから、薄あおい色の器――青磁っていうのかな、と善彦は思う――に氷を盛った上からハモを一切れつまんで眼の前にかざし、おいしいもんですねえ、これは、何ですかな？　と、しゃがれ声で言った。

善彦は、きょとん、として颯子が何を言ってるのかわからなかったのだけれど、これは、何ですか？　と彼女が再び言うので、ハモ、でしょう？　とあまり自信なさそうに答えた。だって、彼女は、ああ、これ、これ、ここのハモの湯びきが食べたかったんだ！　と言ったばかりなのだ。

これが、ハモ？　おいしいもんですねえ、と颯子はまた、しゃがれた作り声で言って、箸で宙に字を書きながら、魚ヘンに豊と書いて、鱧、と言ってクスクス笑ったのに善彦がきょとんとしたまま、何の反応も示さないので、あきれた、という顔をし、不満そうに口をとがらせて、あなたって若いくせに、小津安二郎の映画、見ないの？　と言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com